
雨の降りしきる朝

よんこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨の降りしきる朝

【コード】

N05800

【作者名】

よんこ

【あらすじ】

父親が消えた。そんな知らせが舞い込んだ。

朝起きたら、ケータイに着信履歴があった。5時55分、実家から。

まずこの時点で、何かがあつたんだなと嫌な勘がはたらいた。実家からの電話は3割がた不幸を運ぶのでそのたびにビクビクしているわけだけど、この時間はもう100パーセント何かあつたに違いないと決定付けるのになんのためらいもなかった。

こちらからかけなおす勇気なんてなくて、しかも微妙に寝坊していたから放っておいた。できればこのまま何も聞きたくないな、と切に願いながら。でもまあそのまま何事もなく過ぎるわけがなくて、駅に着いたあたりでまた実家から電話が来た。

そこで聞いた内容は。父親、蒸発したかもしれない。

そうなつてもおかしくない環境だった。家庭内別居なんてずっと前からのことだし、家族の誰とも話なんてしなかったし。実質無職のその日暮らし。ころころ職場が変わつて、年齢も年齢だから雇ってくれるところもなくて。むしろ今まで毎晩ちゃんと家に帰つてきていたことが奇跡だ。

ずっと私は父親を憎んでた。

いつからだろう、うちの家がおかしくなつたのは。私が高校生くらいのおきからだな。仕事のこと。母親のこと。私の進路のこと。学費のこと。お金のこと。お金お金お金。お金が一番大きいな。あの人暴力を覚えるようになってからは、どんどんエスカレートして。殴る殴る、めいっぱい殴る。お酒のビンを床に叩きつける。飛び散る破片。頭に当たつたな。包丁を持ち出されたときは、死ぬかもしれないって思った。毎晩、母親が父親に殴られて泣き叫ぶ声と大きな物音で目が覚めて、泣きながら父親を止めに行ったな。しんどかつたな。ぶるぶる震えが止まらなくて。理性がふつとんだ父親

の力があまりにも強くて、羽交い絞めにしようとしても振り切られて。父親を殺す夢も、父親に殺される夢もよく見た。目が覚めていてもそんな妄想にとらわれて身動き取れなかった。

絶対に許さないって思った。一生恨んだまま生きていくんだって決意した。でも、やっぱりあの人の血を引いているからかな。なんとなく、あの人がどんな気持ちでいたか、想像できる。

傲慢で意地っ張りで、過ちを犯してしまっただけで申し訳なく思っているのに口に出せない。だからもつと意地をはる。引き返せない。優しくしたいのに、怖くて恥ずかしくて怒ってしまう。だれも優しくしてくれない。当たり前だ、ひどいことをしたんだもの。でも謝れない。素直になれない。みんながこつちを冷たい目で見る。怖がって見る。近寄ってくれない。いらいらする。むかむかする。得体の知れないどす黒い気持ちが沸きあがる。なんだなんだ、全部悪いのはこつちか。自分の悪いところは棚に上げて、悪者扱いする気が。ひどいじゃないか。あんまりじゃないか。もういいよ。お前らなんかどうでもいい。好きにしろ。こつちはこつちの好きにしてやる。母親の気持ちも想像できる。わからないわからない。ただ子供たちのことを考えているだけなのに。どうしてわかってくれないの。こんなにも声を張り上げているのに。こんなにも理想がふくらんでいるのに。どうしてどうしてどうして。なんでみんな嫌がるの。どうしてうっとおしがるの。思うとおりのことをしたいだけなのに。がむしゃらにやっているだけなのに。なんでなんでなんで。

本人がどう思ってるのかわからないけれど。こんな感じかもしれない。下手したら、墮ちるところまで墮ちてしまったら私だってこうなってしまうかもしれない。

なんでだろう。前はこんなこと考えなかったのに。父親も母親も、血を分けたとはいえ他人。人と自分との関係、それは、「自分」と「自分以外の人」。それだけ。

もつと距離があつたはず。ちゃんと割り切つて考えられただはず。ごく単純だったはず。

なのに、どうして人の気持ちを想像してしまうんだろう。どうして共感してしまおうとするんだろう。私は父親を憎んでいたかった。ただの悪者でいてほしかった。昔の漫画みたいに、正義と悪にしっかり区別してほしかった。あいまいなグレーゾーンなんていらぬ。確かにひどいことをたくさんしたけれど、あの人にはあの人なりの苦しみがあつたんだろ。なあ、だなんて考えたくない。

これが成長することかな。どんどんどん複雑になっていって、収集がつかなくなる。

一言で言えば、辛い。

もう考えたくない。シャットアウトしたい。嫌いな人のことまで考えたくない。大好きな人のことだけ考えていたい。

辛いよ。大声で泣きたい。泣き叫びたい。雨の中泣き喚きながら走り回ってそのまま地面に突っ伏したい。泥だらけのままのた打ち回って罵詈雑言を吐きたい。のどがかれるまで叫び続けたい。

でもできないよね、そんなこと。だって私いくじなしだもん。勇気がないよ。こんなときに限って理性が働く。私って強がりの天才だな。こんな天才、いらぬよ。もっとほかの才能がほしかった。でもやっぱり動揺してるな。こんなこと考えてるんだって人に知られたら、どう思われるかな。嫌われちゃうかな。こわいな。嫌われたくないな。びくびく。ぶるぶる。

まあ、どうせ父親は帰ってくるよ。完全に消える度胸もないだろうし。へんな宗教に入らなきゃいいけれど。大量の借金作って逃亡したんじゃないか。いいけれど。

とにかく万が一のことを考えて、いろいろ覚悟しなきゃ。これからの生活とか、お金とか、家の権利のこととか。

でも疲れちゃったな。休憩が必要だね。いっぱい寝たいな。きのう干したばかりの羽毛の布団に包まって、雨の音を聞きながら、寒い部屋の空気を頬に感じながらぬくぬくしたい。

でも今日はバイト。講義は午前中で終わりだけれど、これから何
食わぬ顔をして、いつもの元気でちよっとお調子者の大学生として、
バイト先の人と接しなきゃ。それこそ、強がりの才能発揮だ。役に
は立つんだよな。役に立つから余計に腹立たい。

ふう。ご飯を食べよう。

おなかいっぱいになれば、元気になるよ。だいじょうぶ。おいし
いものを食べよう。コーヒーも飲もう。

私、元気。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0580o/>

雨の降りしきる朝

2010年10月8日13時46分発行